

「彼らの目はくらんで見えなくなる」

2018年10月13日

ローマの信徒への手紙 11章6節～10節 もしそれが恵みによれば、行いにはよりません。もしそうでなければ、恵みはもはや恵みではなくなります。では、どうなのか。イスラエルは求めているものを得ないで、選ばれた者がそれを得たのです。他の者はかたくなにされたのです。「神は、彼らに鈍い心、見えない目、／聞こえない耳を与えられた、今日に至るまで」と書いてあるとおりにです。ダビデもまた言っています。「彼らの食卓は、／自分たちの罾となり、網となるように。つまずきとなり、罰となるように。彼らの目はくらんで見えなくなるように。彼らの背をいつも曲げておいてください。」

パウロは、エリヤがイスラエルのたった一人の予言者になり、その私も殺されると神に窮状を訴えた時、神が「わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である」と答えられたという故事から、イスラエル人はキリストの福音を拒んでいるが、現に今も、恵みによって残された者がおり、彼らが福音を受け継いでいくと説いた。残された者は「恵み」によるのである。だから、「もしそれが恵みによれば、行いにはよりません。もしそうでなければ、恵みはもはや恵みではなくなります」と言う。残された者は行いが良かったからではない。行いによって、残されたとすれば、それはもはや恵みではなくなる。恵みとは一方的に与えられるものだからである。パウロは、福音の根幹に関わることとして徹底して、救いは行いによるのではなく、信仰によつてと語る。このことの意味は限りなく大きい、人は行いを見て、評価するのが常である。他人の評価に、どれほど苦しみ、傷ついて来たことか。神の前では、行いは関わりない。恵みによって選ばれ、残された者となるのである。

「では、どうなのか。イスラエルは求めているものを得ないで、選ばれた者がそれを得たのです。他の者はかたくなにされたのです。」選ばれた者はキリストの福音の喜びを得たが、他の者は、神が彼らの心を頑なにした。「『神は、彼らに鈍い心、見えない目、／聞こえない耳を与えられた、今日に至るまで』と書いてあるとおりにです。」この言葉は、申命記 29章3節の「主はしかし、今日まで、それを悟る心、見る目、聞く耳をあなたたちにお与えにならなかった」からの引用であろう。類する言葉は旧約聖書に無数にある。要は、鈍い心、見えない目、聞こえない耳は、神が与えられたということである。

更に「彼らの食卓は、／自分たちの罾となり、網となるように。つまずきとなり、罰となるように。彼らの目はくらんで見えなくなるように。彼らの背をいつも曲げておいてください」と、ダビデも言っていると畳みかけている。この言葉は、詩編 69編 24節、25節の「どうか、彼らの食卓が彼ら自身に罾となり／仲間には落とし穴となりますように。彼らの目を暗くして／見ることができないようにし／腰は絶えず震えるようにしてください」からの引用であろう。だから、ダビデの言葉ではない。この詩編は、襲い来る敵に対し、彼らの喜びの食卓が彼ら自身の罾となり、落とし穴に落ちますように、彼らの目を暗くし見る事ができないように、腰は絶えず震え、曲がったままにしておいてくださいと、歌っている敵愾心に燃える歌である。パウロは、イスラエル人がキリストの福音を信じないのは、神が彼らの目をくらませ見えなくさせたと言っている。ローマ書 9章 18節で「神は御自分が憐れみたいと思う者を憐れみ、かたくなにしたいと思う者をかたくなにされるのです」と書いていたように、神の残された者の選びは神ご一存なのである。